

発表題目：ロックの『人間知性論』における三つの知覚——（1）観念の知覚

春日亮佑（東京大学）

ロックは『人間知性論』（以下、『知性論』）で、三種の知覚（「我々の心の内の観念の知覚」、「記号の意味表示の知覚」、「我々の諸観念の間に存する結合や背馳、一致や不一致の知覚」）について論じている。これらの知覚を吟味することは、『知性論』全体を読み解く手がかりとなるように思われるが、従来の研究において看過されがちであった。そこで、本発表では「我々の心の内の観念の知覚」はいかにして行われるのか、ということに焦点を当てる。この問いに答えるべく、まずは知覚される対象である、「観念（Idea）」の内実を明らかにする。観念の知覚の行われ方を論ずる上で、観念の内実について考察することは不可欠であるし、その考察を通して観念の知覚の行われ方も明らかになるからである。

周知の通り、ロックは観念を「およそ人間が考える際の知性の対象」、「人間が思考する際に心が携わることの出来る一切」と規定する。このように、観念の定義は厳密とは到底言えず、様々な解釈を許すものとなっている。これらの解釈は、およそ二つの立場に分類出来る。その第一は、ロックの観念を「心像」や「感覚与件」といった、いわば「可感的（sensible）」な意味にのみ捉える立場である。古くはバークリやリードがこのように解釈し、ロックの抽象観念に対する批判を展開した。第二は、ロックの観念に可感的な意味のみならず、「意味」や「概念」としか言い表せないような、「可想的（intelligible）」な意味をも認める立場である。こうした解釈は、近年マッキーや富田らによって主張されている。後者の立場が有力であるように思われるが、エアーズやウォームズリーの批判もあり、未だ決着はついていない。

以上を踏まえ、本発表ではロックの観念には可感的な意味だけでなく、可想的な意味もあるという立場を擁護したい。そのために、彼のテキストにおいて可想的な意味で観念が用いられていることを確認した上で、エアーズらの批判を検討し、それらが妥当でないことを示す。しかしながら、ここでまた一つの問題が浮かび上がってくる。ロックの観念に可感的・可想的の二つの意味があったとしても、それらは互いにどのように関わっているのか、という問題である。実際、彼の観念はその内実の豊かさゆえに、多義的で統一性がないとして、ライルなどによって批判されてきた。そこで、本発表ではロックが『知性論』第二巻で論じている、「抽象」や「識別」といった、心の機能に注目することで、可感的な観念と可想的な観念との間に、ある「心の作用（Operation of the Mind）」が働いているということを示して両者の関係を明らかにし、その作用の持つ性格を示す。結果、ロックの観念の内実が明らかになり、また我々がいかにして観念を知覚するのかを示すという、本発表の目的も達成される。